

東大 駒場 友の会



会報第44号

駒場リベラルアーツ基金への 寄付事業の統合について

駒場リベラルアーツ基金は、二〇二二年度に東京大学基金の一つのプロジェクトとして設立されました。この基金は、学生支援、研究支援、環境整備の三つの柱を掲げ、駒場キャンパスのリベラルアーツ教育を支えることを目的としています。現在進行している一号館(時計台)改修も支援しています。

一方、東大駒場友の会も、会員の皆様からの寄付金をもとに、駒場キャンパスの教育・研究環境を支援してまいりました。具体的には、駒場図書館の学生用図書寄贈、駒場博物館の広報支援、駒場祭や学生の課外活動支援などを継続的に行い、さらに駒場キャンパス正門の修復やコロナ対策設備の寄贈など、時に応じた特別支援も実施してきました。

このように、両者の寄付事業の目的は大きく共通しており、支援の対象も多分に重なっています。そこで、寄付の窓口を一本化し、会員の皆様により分かりやすく、寄付しやすい形で支援をお願いできるよう、二〇二五年より東大駒場友の会の寄付事業を駒場リベラルアーツ基金へ統合することといたしました。

駒場リベラルアーツ基金では、銀行振込やクレジットカード・QRコード決済など、多彩な方法で寄付が可能となります。また、同基金への寄付は東京大学の公式な寄付制度に基づくため、領収書が発行され、税法上の優遇措置を受けられるといったメリットもあります。

会員の皆様には、これまでの温かいご支援に心より感謝申し上げます。駒場リベラルアーツ基金への統合後も、東大駒場友の会がこれまで担ってきたきめ細かな支援を維持しながら、駒場キャンパスの教育・研究環境の充実を図ってまいります。今後とも、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。(鳥井寿夫・東大駒場友の会事務局長)

寄付対象活動報告

「縁の下の力持ち」として、東大駒場友の会が行っている学内のさまざまな活動への支援事業について、第四十三号の会報でお伝えしました。教養学部や学生団体の活動等への寄付、学術や文化・スポーツの企画への支援がそれぞれですが、本号ではその第二弾として、駒場博物館、ピアノ委員会、東京大学Diligent HPARR誘致委員会(HPARR)の活動を紹介します。いずれも教養学部・総合文化研究科の学生や教職員が多く参加しているものです。

東京大学Diligent HPARR誘致 委員会の活動報告

私たち東京大学Diligent HPARR誘致委員

会は、国際問題に関心のある学生が集まり、ハーバード大学が主催するアジアおよび国際関係に関する世界最大級の学生国際会議であるHPARR (Harvard Project for Asian and International Relations) を日本に誘致することを目指して活動しています。二〇二四年は最終審査で惜しくもタイに敗れ、東京大学でのHPARR開催は叶いませんでしたが、これまでの活動を振り返り、二〇二五年の誘致に向けて引き続き活動を続けています。

活動の概要

二〇二三年のHPARR誘致活動は、ゼロからのスタートでした。まずは学生メンバーを募り、個別相談会を実施しながら、HPARRの魅力を共有しました。九月には宇宙線研究所の佐川名誉教授を中心とした台湾での国際交流会を開催し、メンバー間の結束を深めました。一〇月から二月にかけては、「HPARR」の川邊健太郎会長や文化庁の河村浩美文化戦略官との面談を行い、支援を募る活動を展開しました。また、文部科学省の河原林友晴氏との協議や会議資料の作成も進めまし

た。

題を踏まえ、二〇二五年の開催に向けた改善策を検討し、誘致成功に向けたさらなる努力を続けています。

活動の軌跡

二〇二五年のHPARR誘致に向けて、昨年度の反省と経験を活かし、協賛金の増加と大学全体の認知向上を図りました。その一環として、新たに設立した国際交流部門を通じてPEAS生や留学生とのネットワークを強化し、一年間で一〇〇名以上の留学生が登録しました。

また、昨年の六月と二月には、駒場キャンパスでOBOG組織「東大三四郎会」と共催し、「HPARR交流祭」を開催しました。このイベントは東京大学一五〇周年記念事業として認定され、卒業生一八〇名、東大生二〇〇名が参加。東大最大規模の学生と卒業生をつなぐ架け橋として、キャリア形成を支援しました。同時に、本イベントには津田副学長をはじめ、OBOGや東大関係者が参加し、HPARR誘致活動についてのPDJを行うことができました。

さらに、国内のみならず、「東大欧州赤門会」や東京大学校友会、東京大学ディベロップメントセンターと共催したオンライン国際交流企画も成功を収め、多くの東大生・卒業生が参加しました。これらの活動を通じて、HPARRの魅力を在学生・OBOG・大学関係者に広く発信しました。

資金面では、国際会議助成金に採択され、一般社団法人東京倶楽部からも助成金をいただくことが決まりました。また、スピーカーとして、衆議院議員の小林鷹之氏、DONAの南場智子氏、国連・世界銀行勤務の方々に登



二〇二四年二月の最終審査では、タイに次ぐ二位という結果となり、ハーバード大学からは「協賛金の不足」および「教授陣の支援不足」が指摘されました。これらの課

壇を打診し、昨年よりも強力な人脈を構築することができました。

加えて、二〇二四年八月には徳島県で開催された「阿波踊りの東大連」に参加し、二〇二五年二月にハーバード大学での営業活動の一環として、東京大学の法被を着て阿波踊りを披露しました。入念な練習を重ねた演舞は大盛況となり、会場は大歓声に包まれました。今年の誘致国としては、バングラデシユ、ウズベキスタン、ベトナム、インドが競合となりましたが、二年間の準備を万全に整え、現地でのロビー活動もうまく進めることができ、東京大学の存在感を世界に示すことができました。

IPAR 東京大学開催の決定

そして、つい数日前、東京大学でのIPAR開催決定の連絡を受けました。日本では一年ぶり、東京大学では二〇年ぶりの開催となり、今は感動と達成感でいっぱいです。

この国際会議では、世界中のトップリーダー約四〇〇名を東京大学に集め、東京大学のプレゼンスを世界に広く発信する貴重な機会としたいと考えています。

感謝の言葉

最後に、これまで私たちの活動にご支援をいただいたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

引き続き、東京大学 Diligent IPAR 実行委員会をどうぞよろしくお願いいたします。

以上、二〇二四年度の活動報告とさせていただきます。

(東京大学 Diligent)

東京大学ピアノ委員会 二〇二四年度活動報告

中井悠

二〇二四年度、東京大学ピアノ委員会は、楽器の可能性を掘り下げ、演奏体験を再定義するべく、恒例の選抜学生コンサートのほか、特に「楽器」そのものにスポットライトを当てた室内楽コンサートを二回開催しました。

まず五月にピアノスト井上郷子氏をお呼びして、『プリペアードピアノのからくり』と題したコンサートを開催しました。単なる演奏会にとどまらず、希望者は数時間にわたるピアノのプリパレーション作業を間近で見学する機会を設けました。ピアノの内部に異物を仕込むことで楽器の響きを変容させていく様子は、もはや実験室そのもの。「ピアノってこんな音出るんだ!」と驚く観客、「ピアノにこんなことしていいの?」と戸惑う観客、「何を仕込んだら一番面白い音になるのか」と本気で考え始める観客——そんな好奇心渦巻く空間が生まれました。



年明けの一月には、アメリカのサクソフォニスト Neil Leonard 氏を招聘し、『サクソフォンと想起のからくり』と題したコンサートを開催しました。この公演ではサクソフォンの音が電子変調され、もはやサクソフォンの音とは思えぬ音が会場を満ちたり、演奏者の息遣いがリズムムとして刻まれ、不思議

議とサクソフォンらしさを保ち続けるといふ、一種のパラドックスを体験する場となりました。またこちらにも単なる演奏会にとどまらず、レクチャー付きの体験型プログラムで、希望者がステージに上がり、「Leonard 氏と即興でデモ作品を制作するという一風変わった試みが行われました。」「視聴するだけのコンサート」から「関わるコンサート」へ——そんな実験的精神が、東京大学にふさわしい挑戦であると信じています。

今年度はまた、観客層にも変化がありました。これまで東大関係者に限定していた入場を外部の一般客にも開放し、『プリペアードピアノのからくり』には約一〇〇名、サクソフォンの想起のからくりには約一四〇名が来場しました。好奇心旺盛な多彩な観客の増加は、演奏会をより活気あるものにしてくれました。

さらに、毎年恒例の選抜学生コンサートでは、学生主体の色を二層濃くするため、ポスターやプログラムの制作、司会までを学生自身が担当しました。今年はまだ、演奏者を選ぶ従来のオーディションに加え、「コンサート企画」そのものを競う「企画オーディション」を実施。来年度はこの企画オーディションを二回に増やし、より多彩な発想を生かした演奏会の実現を目指します。「ただ上手い(とされる)演奏者を集める」から「独創的な企画を生み出す」へ——コンサートの作り方をものを見直す試みを加速していきます。

本年度の活動には、(中井自身の研究もその一環を成す)「批判的楽器学 (Critical Organology)」という音楽学最先端の視点を取り入れ、楽器というものが単なる道具ではなく、

文化や思想の表れであることを意識しながら、国内外の演奏家との連携を図りました。ただ素晴らしい演奏を聴くだけでなく、研究と実践が交差する場を創り出すことが、東京大学らしい音楽活動のあり方ではないかと考えています。

本年度の活動が無事に実施できたのは、東大友の会の皆様のご支援があったからです。いつもながらの温かいご協力に、心より感謝申し上げます。

(大学院総合文化研究科超域文化科学専攻 准教授 東京大学ピアノ委員会 委員長)

駒場博物館二〇二四年度展覧会・イベント報告

東京大学駒場博物館 折茂克哉

二〇二四年度に開催した展覧会とその他のイベントは以下のとおりである。

「日本農芸化学会創立一〇〇周年記念展」

会期：三月二〇日(水・祝)～九月八日(日)

主催：公益社団法人日本農芸化学会

協力：一般社団法人 東大駒場友の会

二〇二四年に創立一〇〇周年を迎えた日本

農芸化学会を紹介する展覧会を開催した。

「農芸化学」という研究分野は、かつて駒

場の地にあった東大農学部時代から始まって

おり、その一〇〇年の歴史を振り返った。オ

リザニン(ビタミンB1)の発見者である鈴木

木梅太郎博士が一九二四年(大正一三)に日

本農芸化学会を創立してから二〇〇年、そ

の節目の年である二〇二四年(令和六)を記

念した企画展示であった。同時期に、日本農

芸化学会の一〇〇周年の記念式典、記念大会、

シンポジウムなどの記念事業が開催され、学会の研究者、企業の方々などの関係者のみならず、学生さんや一般の方に向け広く開かれた展示を行ったため、周辺の中高校生など幅広い年代の方々にご参加いただくことができた。明治・大正・昭和・平成・令和と激動の時代の中で、日本農芸化学会が日本人の健康水準を上げ続けた二〇〇年の功績を振り返るとともに、日本を代表する生命科学系学会の一つとして、また新たな二〇〇年のスタートを切るため、日本農芸化学会とは何なのかを、この展示を通して、専門分野の方はもとより一般の方にも広く知っていただけたことと思う。

「変わる高さ、動く大地——測量に魅せられた人々の物語——」

会期：九月二八日(土)～二月二四日(日)
 主催：東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館 共催：国土交通省 国土地理院、国立研究開発法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター 地質情報基盤センター 地質標本館
 協力：東京大学総合図書館、東大駒場友の会

二〇二五年春から(標高)は水準点から、電子基準点で観測された(楕円体高)と(ジオイド)から求めた高さに移行する。高低を意識させないGoogle Mapを使い慣れた私たちに、これはどんな影響を及ぼすのであろうか?そもそも地球が(地球)ではなく、(扁率)と判明するのは一八世紀のこと。続く二〇〇年余の間、人々は凹凸の激しい大地を三角測量網で覆い、誤差の扱いを覚え、測量技術を洗練させ、地下の資源分布を示す

彩色地質図を作り上げた。(標高)は気圧計から水準測量を経て、今や宇宙から計測されており、「動かざること山のごとし」の比喻に反して、刻々と変化する大地の動きを、人工衛星が監視しているのである。他方、二〇二二年度から高校で「地理」が半世紀ぶりに必修になった。この背景には、グローバル化やGIS(地理空間情報システム)の普及だけでなく、気候変動や災害の大規模化が挙げられる。ハザードマップを読み取る能力が求められるのだ。今を生き抜く基礎知識のひとつ・地理は、「文理融合」や「領域横断」が語られるずっと前から総合的な学問である。地図の美しさやデザイン性は言うまでもなく、紀行文やエッセイなど、文学とも強い

親和性を持ち、膨大なデータや高度な測量技術の発展の背後には、好奇心旺盛な技術者・研究者が必ず存在し、多彩なドラマがある。本展では、実際に使用された測量機材や作成された歴史的地図に加えて、関連する文学作品も紹介しながら、近代から現代までの三〇〇年にわたる測量の歴史を科学的かつ文化的な切り口から辿った。

関連企画「変わる高さ、動く大地——測量に魅せられた人々の物語——」ギャラリートーク
 一月二日(土)(専門家向け) 二時～、四時～
 稲垣秀夫(国土地図株式会社 代表取締役社長) 村上広史(青山学院大学 教授)
 一月九日(土)(般向け) 二時～、四時～
 稲垣秀夫(国土地図株式会社 代表取締役社長) 折茂克哉(東京大学駒場博物館 助教)

一月二四日(日) 一五時～

石原あえか(本学教授) 村上広史(青山学院大学教授)

「響けわれらが声——法政大学大原社会問題研究所所蔵ポスターから見る戦後の労働者像」

会期：二〇二五年二月一日(土)～二四日(月)
 主催：科研費(基盤C)「戦後日本における労働者像の生成と文化に関する総合的研究」サライーマンの社会文化史」
 共催：法政大学大原社会問題研究所 協力：東大駒場友の会

科研費(基盤C)「林業労働者の文化運動：空白のサークル運動史を解明する」

「思わざるまでにわが声美しき労働歌を庁舎の壁に響かす」。これは一九五〇年代に公務員として働いた無名の女性が残した短歌である(渡邊順三・信夫澄子)「歌にみる日本の労働者」新評論社、一九五六年)。没個性的なホワイトカラー一層の代表と思われがちな公務員が、無機質な壁に囲まれた職場環境の中にあつて歌う労働歌、それが「美しく」自分の耳に響くのは、自分たちも「労働者」なのだという誇りや希望が込められていたからだろう。一九四五年度の敗戦後、日本社会はあらゆる領域にわたる民主化を経験する。一九五〇年代から六〇年代にかけて活発に展開された労働運動は、「戦後民主主義」の実践でもあつた。「労働者」という言葉が想起させる、過酷な現場労働に従事する人々だけではなく、サラリーマンや事務職に携わる女性たちもまた、等しく「労働者」として登場した時代が、確かに戦後日本の一時期にはあつた。それがやがて「働く夫、支える妻」という性別役割分業に集約していき、女性労働は補助的な役割を担うものとされていく。戦前

からの長い歴史を持つ法政大学大原社会問題研究所が所蔵する労働組合・労働運動関連ポスターから見える「労働者の声」は、戦後八〇年の現在を生きる私たちに何を伝えるのだろうか。本展示は、多業種の労働組合・労働運動関連ポスター約四〇点を通して、これまでの「労働者」像を浮かび上がらせ、そこに込められた希望の形を伝えるものであつた。

関連企画 大原社旗問題研究所月例研究会 兼「響けわれらが声——法政大学大原社会問題研究所所蔵ポスターから見る戦後の労働者像」ギャラリートーク
 解説者：鈴木貴宇(早稲田大学 文学学術院 教授)、谷合佳代子(公益財団法人大阪社会運動協会・大阪産業労働資料館エル・ライブラリー館長 常務理事)
 開催日：二〇二五年二月二日(日) 一四時

(大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻 助教)

味覚のアトリエ@駒場

二〇二四年十一月八日(金)の晩、第十三回目となる味覚のアトリエ@駒場がファカルティハウスで開催され、五五名の参加者が集いました。学生の食育という企画の主旨を重視して学生の枠を三〇名と多めに設定したため、東大駒場友の会の会員枠につきましては初回受付開始後八分まで満席となりました。後日、若干の追加枠を設けましたが、ご参加いただけなかった会員の皆様にお詫び



申し上げます。



今回のテーマは「食のサステナビリティを考える」。二部構成で、第一部は、一般社団法人日本サステイナブル・レストラン協会代表理事の下田屋敷（しもたや・たけし）氏による「自然を食べる」と題した講演でした。世界の食事情とその危機、レストランや消費者が可能な取り組み例や日本での現状など、多岐にわたるお話に参加者はメモを取りながら熱心に耳を傾けていました。

第二部は、フランス農事功労章協会（COMA）の副会長であり、行列のできる都内屈指の人気店であるパティスリーエーグルドゥースのオーナーシェフでもある寺井則彦氏によるデザートデモンストレーションでした。フランス菓子の素材や産地に対する考え方、トレンドなどを語りながら、賞味期限が一時間という店舗でも入手困難なトルシユ・オ・マロン（モンブラン）をご自身の店と同じ製法でメレンゲ作りから披露してくださいました。

講習後には、エーグルドゥースのケーキ六種によるケーキビュッフェが催され、美しいケーキがずらりと並ぶ様子に、参加者から歓声が上がりました。

講演後のアンケートでは、「食のサステナ



ビリティについて新たな視点を得られた」、「寺井シェフの実演を間近で拝見することができた」、「美味しいケーキを堪能できた」等、多くの感謝の声が寄せられました。

秋の講演会「東大発運動能力の高め方・健康長寿を目指すからだの正しい使い方」報告

工藤和俊

今年度「秋の講演会」は、秋晴れに恵まれた一月三日（土）に開催されました。講師として、二〇二二年から二〇二六年まで本会の会長を務められた小林寛道先生にご登壇頂きました。小林先生は、長年にわたり日本陸上競技連盟科学委員長として日本の競技力向上に尽力されると同時に、駒場では合気道の種目を担当し、日本の武道が持つ身体操作の奥義を自ら実践し研究されてきました。これらの研究実績をもとに駒場のトレーニング施設「QOMジムのマシン開発を進め、スポーツ選手のみならず若年者から高齢者まで幅広い人々の健康長寿を実現する方法の開発に取り組んでこられました。

健康維持のための運動としては、有酸運動、筋力トレーニング、ストレッチの3つが主流でした。小林先生はこれに加えて「認知動作型トレーニング」の重要性を指摘しています。

このトレーニングは、運動の質（Quality of Movement, QOM）を向上させるものであり、体幹筋の活用、認知機能と連携した動作トレーニング、高齢者向けのバランス改善運動などが含まれています。講演会では、高齢者向けに特化した運動プログラムにより、九〇



歳を越えた方でもトレーニングによって姿勢や歩行が改善する具体例を報告頂きました。

講演会の後半では「実技編」と題して、体幹や骨盤の使い方、歩く際の体重移動の仕方、膝・腰・胸・肩の柔軟性の高め方など、日常生活の中で可能な認知動作トレーニングを紹介頂きました。これらのトレーニングは、

誰しもが日常生活の中で実践しうる基本的なものでありながら、一工夫を加えることによつて様々な動きの質向上が可能になり、同時にそれは加齢という誰しもが避けて通れない身体的変化に抗するための、強力な支えとなります。小林先生の動きは、八十歳を越えた方とは信じがたいものであり、私自身大変驚かされました。小林先生の合気道授業には私も参加経験がありましたが、小林先生からは「どうだ、私の動きはあの頃よりも切れ味が増しているだろう」と言われ、「あの頃」から二十年以上の月日を経て間近で目にする「奥義」に大変感銘を受けました。参加者の方々からも、「実技が大変良かったです」、「多くのにとって最大の関心事である健康に直結したお話でとても興味深く拝聴しました」、「先生の若さに感激しました」等々多くの感想を頂き、盛会の内に終了となりました。

（大学院総合文化研究科教授）

東京大学運動会活動トピックス

箱根駅伝出走とここに至る経緯

古川大晃

本年の箱根駅伝九区に、関東学生連合チームで出場しました。博士課程四年の古川です。結果は二二チーム中区間一八位相当であり、悔しさの残るレースではありましたが、夢だった箱根駅伝を走ることができました。

学生連合チームは、箱根駅伝予選会における非通過校のうち個人順位上位一六人が選出されるという制度です。そのうち一〇人が本戦を出走し、六人は補欠に回ります。私は博士一年と二年で一六人には選ばれましたが、一三番手と一四番手でいずれも補欠となりました。博士三年時は第一〇〇回記念大会であり、連合チームが編成されませんでした。どうしても諦めきれず、最後の望みとした博士四年目の予選会。幸い連合チーム内五番手となり、出走権を勝ち取ることができました。

夢だった箱根駅伝を走れた要因を考えた際に、練習の成果であることは言うまでもありません。ここ数年は毎日約二〇kmを走り、週に二回の高強度トレーニングを継続して行ってきました。この継続が大きな土台となりました。

されども近年成績が伸び悩む中で、この一



年のもうひと伸びをくれた一人は八区を走った秋吉君です。彼は昨年度、大幅に自己新記録を更新し、私にとって初めての「同部活内で自分より速い人」になりました。それが非常に悔しく、彼に負けられないように日々の練習量と質を上げました。それにより、過去一番の練習を通年で継続できました。私を巻き込み、一緒に強くなってくれた彼に大変感謝していますし、櫻りレーができた喜びは一人です。

給水係として参加した箱根駅伝

八田秀雄

工学部三年の秋吉君と、総合文化研究科身体運動博士四年の古川君の二人が、箱根駅伝学生連合チームで出走できることになり、八区(平塚-戸塚)が秋吉君、九区(戸塚-鶴見)が古川君の配置が内定したのは二月上旬でした。その数日後に古川君から給水係の依頼を受け、私も年末年始を例年とは違う緊張感で過ごすことになりました。一二月からインフルエンザが流行しており心配でしたが、幸い二人とも健康で、一月三日当日を迎えました。朝、まず戸塚中継所に行つて、古川君と最後の打ち合わせをして激励しました。そして横浜駅前に移動して、給水係のピブスをつけて待機します。他大学の給水係は小柄で細い部員がほとんどなのに、私は長身で白髪、あんなおじさんが本当に給水係が誰かのお父さんかというざわめきがあり、「給水おじさん」と新聞では名付けられました。待機中、戸塚中継所で東大タスキリレーになったというのを周りから聞き、感激しました。秋吉君は前半から快調で途中まで区間首位、結果的に東大生の最高記録となる区間七位相当の快走でした。そしていよいよ古川君が横浜駅前に走ってきます。姿が見えて「古川、本当に箱根走っている!」と思いつつながら、



せ通りまず水を渡した後、さらに予定にはなかったスポーツドリンクも渡しました。そして彼の後ろ姿に激励の声をかけようとして、思わず両手でガッツポーズになっていました。この給水の様子



アメリカンフットボール部)は「一瞬必勝」を掲げ、一瞬一瞬目の前の相手と戦うことをスローガンとして活動をしていた。春シーズンは、定期戦である富士フイルム戦、防衛

がテレビに映っているとは全く知りませんでした。彼の捨てたボトルを拾って元の場所に返る時には、なんとも言えない幸せ感のような気持ちでした。古川君も後半粘つて、鶴見で繰り上げになることなく、タスキを渡せました。これで私としては十分で、その後この給水が大きな話題になったことは、意外としか言いようがありません。定年前のご褒美ということかなと思っています。ただ、以前に私の授業をとった卒業生が、私のことを思い出してくれたということが多くあったようで、それは前期課程担当の教員として、うれしいことでした。走った二人が本当によく頑張ってくれたおかげで、私も忘れられない体験ができました。二九歳大学院生ランナーに六五歳教授が給水という、箱根駅伝でも多様な性も大事ということが示せたなら、良かったと思います。多くの方に応援いただきありがとうございます。ごさいました。

(大学院総合文化研究科教授陸上運動部長)

アメリカンフットボール部 二〇二四年度活動報告

小林良輔

二〇二四年のWARRIORS (東京大学



水とスポーツドリンクを両方持つて私も走り始めました。打ち合わせ

今回の箱根出走は本当に多くの方に支えていただいた賜物ではございますが、今回は特に陸上部の御三方を中心に、出走に至った経緯を振り返りました。一生で一番の歓声の中走った箱根駅伝は、思い描く以上に心震える舞台でありました。今後も競技と研究に取り組んでいければと思います。

(大学院総合文化研究科 博士課程)

「日本」という目標を達成するためには、関東三位以内に入り、全日本選手権に出場する必要があったが、明治大学戦の勝利によりその希望が次へとなつていくこととなる。その後も勢いに乗り、次々と白星を積み重

夏合宿を経て、九月に立教大学との試合を開幕戦として秋のリーグ戦が幕を開けた。秋のリーグ戦では、序盤に苦戦を強いられ三連敗を喫するものの、そこからチームは見事に立て直し、強豪校相手に快進撃を見せた。その象徴とも言えるのが、明治大学戦での劇的勝利である。格上である明治大学に対し、実に二三年ぶりの秋シーズンでの勝利を果たしたのだ。試合は激闘の末、タイブレークに突入し、最後は粘り強い戦いを見せて勝利を掴み取った。この試合は、今シーズンのチームの成長を象徴する一戦となった。

ねていったWARRIORSは、ついに日本選手権出場をかけた大一番である六試合目、慶應義塾大学戦を迎えた。

明治大学戦と同様、タイプブレイクに突入した後、勝利を収めることができたが、得失点差により、慶應義塾大学に全日本選手権への出場を許し、日本一という夢が途絶えることとなった。残る最終戦、桜美林大学戦も勝利し、同率関東三位、順列五位、リーグ戦を四勝三敗で終えた。関東一部リーグTOP八に昇格して以来、勝ち越しを達成するという初めての快挙を成し遂げた。

二〇二四年シーズンは、春の双青戦での勝利や、秋のリーグ戦では苦境を乗り越え、四連勝を収めるなど、チームの成長と進化を強く感じさせる一年となった。

(東京大学運動会アメリカンフットボール部マーケティングスタッフ 教養学部理科二類)

◆東大駒場友の会オリジナル 学事カレンダー二〇二五年度版

駒場一キャンパス生協購買部及び東大生協東大グッズ通販サイト (<https://www.uicoop-join.jp/goods/>) にて、三月中旬より販売いたします(一部 税込一、〇〇〇円)

学生・教員・職員による応募写真(キャンパスの風景写真)を掲載しています。ぜひお手にとって御覧ください。

なお、駒場リベラルアーツ基金に一万円以上ご寄付くださった方には、当カレンダーをプレゼントいたします。



◆東大駒場リベラルアーツ基金へのご寄付について

当会報の冒頭にてご説明いたしました通り、二〇二五年度より東大駒場友の会の寄付事業は「駒場リベラルアーツ基金」に統合いたします。

駒場リベラルアーツ基金へのご寄付は、左記QRコードからアクセスいただけます。ご寄付の際は、寄付のきっかけ欄に「東大駒場友の会」とご記載ください。

一万円以上ご寄付いただいた方には、お礼として、「学事カレンダー」を差し上げます。



(数に限りがございます)
駒場リベラルアーツ基金の活動やご寄付の謝意・記念品等につきましまして、同封の「駒場リベラルアーツ基金パンフレット」をご覧ください。

◆金曜講座二〇二五年度・夏学期(サセマスタ)

東京大学教養学部主催「高校生と大学生のための金曜特別講座」は二〇二五年度・夏学期(サセマスタ)も会員の皆様に受講いただけることになりました。(ただし、二〇二五年度・冬学期以降も継続して受講可能かどうかは現段階では未定)

◆駒場博物館

駒場博物館では二〇二五上半期に次の展覧会を予定しております。

所蔵品展「中国北方の金属器」・「美術展を本の世界で五」駒場博物館カタログ資料室二〇二三/二〇二四年度 新収蔵分の紹介

会期 三月二日(月)～四月二五日(金)
休館日 毎週土曜日・日曜日

特別展 「Reproductions」(仮題)

会期 五月一〇日(土)～六月二九日(日)
休館日 毎週火曜日

特別展 「ブルガークゴフ『白衛軍』挿絵原画展」(仮題)

会期 七月一九日(土)～九月一五日(月・祝)
休館日 毎週火曜日

開館時間 一〇時～一七時 入館無料

(来場に関する最新情報を事前に駒場博物館ウェブサイトにてご確認ください)
<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/index.html>



受講を希望される方は左記のQRコード、または、<http://bit.ly/4QSMW8C> にアクセスし、必要事項をご記入の上、お申し込みください。

受付手続きに日数を要するため、直前にお申し込みいただいても受講に間に合わない可能性もありますので、ご注意ください。



穏やかな日差しの中でゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理

ルヴェ ソン ヴェール 駒場

東大駒場友の会会員の方は食後のお飲み物(コーヒーまたは紅茶)が1杯おかわり可能です。ご注文の際にWEB会員証をご提示くださいませ。

[営業時間] 11:00～14:30、17:00～21:00

Tel : 03-5790-5931 / Fax : 03-5790-1902

◎駒場ファカルティハウス内

東大駒場友の会会報【第44号】2025(令和7)年3月15日発行
東大駒場友の会 会長 木畑洋一

〒153-8902 目黒区駒場3-8-1 東京大学内
お問い合わせ等は、メールでのご連絡をお願いします
メール info@tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp
web サイト <https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp/>



デザイン・印刷 株式会社双文社印刷
<https://www.sobun-printing.co.jp>

会報のバックナンバーをインターネット上でご覧いただけます。
東大駒場友の会ホームページのトップ画面に「会報バックナンバー」というボタンがありますので、そこからお入りください。